

## シンガポールにおける日本人経営者の発言(B)

5

1976年12月5日、シンガポールのリー・クワン・ユー首相は、NTUC（全国労働組合会議）のセミナーの席上以下のように演説した。

1977年の経済見通しは問題が多い。OPEC関係会議は値上げを考慮している。アメリカ、ヨーロッパ、日本における経済の回復が停滞の兆候を示している時に、原油値上げが行われるのである。10  
ここ何年かは政治的にも不確定性が大きい。1977年1月20日、アメリカの新しい大統領が登場するが、その後もアラブとイスラエルの問題に改善がなければ、1～2年のうちに政治的な危機が到来しよう。もしアラブが石油を禁輸すれば、世界は再び不況に陥るだろう。

工業国の中で、2つの国（西独と日本）は原油価格高騰という経済問題の克服において他の国々よりも大きな成功を収めた。ドイツと日本両国では、労働者と経営者は自分たちの製品の品質、労働者の生産性、経営者の能率性に誇りをもっている。労働者と経営者は互いに相手を絶えざる抗争状態にある対立陣営だとみなしてはいない。両国ともに共産党の労働組合への影響力はとるにたらない。両国は荒廃した祖国を再建するために強烈な国家的統一を示した。 15

われわれはドイツ人と日本人から学ばねばならない。シュロン造船所の社長、桜井氏は12年以上もシンガポールで働いてきた人である。同氏が最近語ったことは、ほかの日本人も同意するであろう。20  
シンガポールの労働者は知的であり、習得が早い。しかし、実際は未だ日本の熟練工の水準に達していない場合でも、シンガポール人はもはや学ぶべきことはないとすぐに考えてしまう。桜井氏はシンガポールと日本人のちがいについて胸にこたえる真実を語った。日本の労働者は厳密に言えば自分の仕事でないことをするためにわき道にそれる。同僚が席を外している時にはその電話をとる。熟練工は自分の機械を掃除し、まわりの床をきれいにする。それに対して、シンガポール人は、床掃除は自分の仕事ではないのだからと、誰かほかの人間が掃除してくれることを期待する。シンガポール人の関心は自分の仕事と自分の昇進の見込みに限られる。自分の職責を拡げることには熱心でない。同僚と協力して会社をより能率的、生産的にし、その結果利益をふやし、各人の賃金をふやす——こうした考え方はあまりにあいまいなヴィジョンであり、シンガポール人を動かさない。 25

日本の労働者のように、自己と会社を一体視する労働者はあまりに少ない。一体感と忠誠心の欠如 30  
を示す一つの現象は簡単に転職する慣行である。政府代表は、NWC（全国賃金評議会）に対して、軽々しい理由で転職するのを抑える措置をとるよう求めるであろう。NWCの給付を、過去1年間同一の雇用者の下で何か月勤めたかに応じて、つまり勤務した月数を12で割って支給するようにしたい。

35